

【日本昔ばなし】桃太郎

動画リンク: <https://youtu.be/eP1UBgHfsMw>

今回は日本の昔ばなし、「桃太郎」を学びながら、日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部、2部、3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部、2部、3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

■はじめに。

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。作られた物語なので、当然作者は存在します。

■おとぎ話

子供に語って聞かせるための「昔ばなし」や童話のことです。おとぎ話の中には語り継がれてきた昔ばなしも、そして創作である童話も含まれます。

「桃太郎」はとても有名な日本の昔ばなしです。

それでは「桃太郎」のお話を始めます。

むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。

毎日、おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

ある日、おばあさんが川でせっせと洗濯をしていると、川上から大きな桃が一つ、

「ドンブラコッコ、スッコッコ。ドンブラコッコ、スッコッコ。」と流れてきました。

「おやおや、これは見事な桃だこと。おじいさんへのおみやげに、持って帰りましょう。」

おばあさんはそう言いながら桃を取ろうとしましたが、手が届きません。おばあさんはそこで、「あっちの水は辛いぞ。こっちの水は甘いぞ。辛い水はよけて来い。甘い水によって来い。」

と歌いながら手を叩きました。すると桃はまた、「ドンブラコッコ、スッコッコ。ドンブラコッコ、スッコッコ。」と言いながら、おばあさんの前へ流れてきました。

おばあさんはにこにこしながら、「早くおじいさんと二人で分けて食べましょう。」

と言って、桃を拾い上げ、洗濯物と一緒にたらいに入れて、おうちへ帰りました。

夕方になり、おじいさんは山から柴を背負って帰ってきました。「おばあさん、今帰ったよ。」

「おや、おじいさん、おかえりなさい。待っていましたよ。さあ、早くお上がりなさい。いいものをあげますから。」

「それはありがたいな。何だね、そのいいものというのは。」おじいさんはわらじをぬいで上がりました。

その間におばあさんは戸棚からさっきの桃を持ち出して、「ほら、ごらんなさい、この桃を。」と言いました。

「これは見事だ。どこからこんな桃を買ってきたんだ。」

「いいえ、買ってきたのではありません。今日川で拾ってきたのです。」

「え、川で拾ってきた？それはいよいよ珍しい。」

おじいさんは桃を両手に乗せて眺めていました。

すると突然桃がぽんと割れて、「おぎゃあ、おぎゃあ。」と赤ん坊が出てきました。

「おやおや、まあ。」おじいさんもおばあさんもびっくりして声をあげました。

「まあまあ、私たちがいつも子供が欲しいと言っていたから、きっと神様がこの子を授けてくださったに違いない。」

おじいさんもおばあさんも喜んでこう言いました。

そして、あわてておじいさんがお湯を沸かし、おばあさんがおしめをそろえ、大騒ぎして赤ん坊を抱き上げてお湯に浸からせました。

すると赤ん坊は抱いているおばあさんの手をはねのけました。

「おやおや、なんという元気のいい子だろう。」

おじいさんとおばあさんは顔を見合わせて笑いました。

そして桃の中から生まれた子だということで、この子に桃太郎という名前をつけました。

おじいさんとおばあさんは大事に桃太郎を育てました。

桃太郎はだんだん成長して、他の子供よりも体が大きく、力が強く、すもうをとっても近所の村でかなうものはいませんでした。

しかし、性格は優しく、おじいさんとおばあさんに孝行しました。

桃太郎は十五歳になり、日本中で桃太郎ほど強いものはいないようになりました。

桃太郎はどこか外国へ行って、力だめしを試してみたくなりました。

そのころ、外国の島々をめぐる帰ってきた人が、いろいろ珍しい話をしていました。

「何年も船をこいで行くと、遠い遠い海の果てに鬼ヶ島という所がある。」

「悪い鬼どもが、いかめしい鉄のお城に住んで、国々から奪った宝物を守っている。」と言いました。

桃太郎はこの話を聞くと、鬼ヶ島へ行ってみたいくなり、家に帰るとおじいさんに、「旅に行かせてください。」と言いました。

おじいさんはびっくりして、「お前どこへ行くのだ。」と聞きました。

「鬼ヶ島へ鬼退治に行こうと思います。」と桃太郎は答えました。

「それはいさましいことだ。じゃあ行っておいで。」とおじいさんは言いました。

「まあ、そんな遠方へ行くのでは、さぞおなかがすくだろう。よしよし、おべんとうを作ってあげましょう。」とおばあさんも言いました。

そこで、おじいさんとおばあさんは庭の真ん中に大きな臼を持ち出しました。おじいさんが杵を持ち、おばあさんが餅をこねる役をしました。

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。」とおべんとうのきびだんごをつきはじめました。

きびだんごがうまそうにできあがると、桃太郎のしたくもすっかりできあがりしました。

桃太郎はお侍のような陣羽織を着て、刀を腰にさし、きびだんごの袋をぶら下げました。

そして桃の絵のかいてある軍扇を手に持って、「ではおとうさん、おかあさん、行ってまいります。」と言って、ていねいに頭を下げました。

「じゃあ、りっぱに鬼を退治してくるがいい。」とおじいさんは言いました。

「気をつけて、けがをしないようにね。」とおばあさんも言いました。

「大丈夫です、日本一のきびだんごを持っているから。」と桃太郎は言って、「では、ごきげんよう。」と元気な声をのこして出発しました。

おじいさんとおばあさんは門の外に立って、いつまでも見送っていました。

桃太郎はずんずん進んで大きな山の上に来ました。すると草むらの中から「ワン、ワン。」と声をかけながら犬が一匹かけて来ました。

桃太郎がふり返ると、犬はていねいにおじぎをして、「桃太郎さん、どちらへ行くのですか。」とたずねました。

「鬼ヶ島へ鬼退治に行くのだ。」
「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」
「一つください、お供しましょう。」

「よし、よし、やるからついて来い。」犬はきびだんごを一つもらって、桃太郎のあとについて行きました。

山を下りてしばらく行くと、今度は森の中にはいりました。

すると木の上から「キャッ、キャッ。」と叫びながら猿が一匹、かけ下りて来ました。

桃太郎がふり返ると、猿はていねいにおじぎをして、「桃太郎さん、どちらへ行くのですか。」とたずねました。

「鬼ヶ島へ鬼退治に行くのだ。」
「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」
「一つください、お供しましょう。」

「よし、よし、やるからついて来い。」猿もきびだんごを一つもらって、あとについて行きました。

山を下りて森を抜けて、今度は広い野原へ出ました。

すると空の上で「ケン、ケン。」と鳴く声が出て、きじが一羽とんで来ました。

桃太郎がふり返ると、きじはていねいにおじぎをして、「桃太郎さん、どちらへ行くのですか。」とたずねました。

「鬼ヶ島へ鬼退治に行くのだ。」
「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」
「一つください、お供しましょう。」

「よし、よし、やるからついて来い。」きじもきびだんごを一つもらって、桃太郎のあとについて行きました。

犬、猿、きじと、これで三人いい家来ができたので、桃太郎はさらに勇み立って、またずんずん進んで行き、やがて広い海ばたに出ました。

そこにはちょうどいいぐあいに船が一そうつないでありました。桃太郎と三人の家来はさっそくこの船に乗り込みました。

「わたくしは漕ぎ手になりましょう。」
犬はこう言って船をこぎ出しました。

「わたくしはかじ取りになりましょう。」
猿はこう言ってかじに座りました。

「わたくしは物見をつとめましょう。」
きじはこう言ってへさきに立ちました。

うらかないいお天気で、まっ青な海の上には波一つ立ちませんでした。

稲妻が走るようだといおうか、矢を射るようだといおうか、目のまわるような速さで船は走って行きました。

ほんの一時間走ったころ、きじが「あれ、あれ、島が。」と叫びながら、ぱたぱたと高い羽音をさせて空にとび上がり、まっすぐに飛んでいきました。

桃太郎もすぐきじの立ったあとから向こうを見ますと、なるほど、遠い海のはてに薄ぐろいものが見えました。

船が進むにつれて、それはだんだんはっきりと島の形になってあらわれました。

「ああ、見える、見える、鬼ヶ島が見える。」桃太郎がこう言うと、犬も猿も声をそろえて「万歳、万歳。」と叫びました。

見る見る鬼ヶ島が近くなり、硬い岩で畳んだ鬼のお城が見えました。いかめしい鉄の門の前に見張りをしている鬼の兵隊の姿も見えました。

そのお城のいちばん高い屋根の上に、きじがとまってこちらを見ていました。

こうして何年もこいで行かなければならないという鬼ヶ島へ、ほんの目をつぶっている間に来たのです。

桃太郎は犬と猿をしたがえて、船からひらりと陸の上にとび上がりました。

見張りをしていた鬼の兵隊は、その見慣れない姿を見てびっくりし、あわてて門の中に逃げ込み、鉄の門を固くしめてしまいました。

その時、犬は門の前に立って、「桃太郎さんが、お前たちを成敗においでになったのだぞ。あける、あける。」

どなりながら、ドン、ドンと扉をたたきました。鬼はその声を聞くと、ふるえ上がって、いっそう一生懸命に中から押さえていました。

するときじが屋根の上からとび下りてきて、門を押さえている鬼どもの目をつつきまわりました。

鬼は逃げ出し、その間に猿がするすると高い岩壁をよじ登って行って、門を中からあけました。

「わあッ。」と、いっせいに声を上げて、桃太郎の主従がいさましくお城の中に攻め込みました。

鬼の大將も大勢の家来を引き連れて、太い鉄の棒をふりまわしながら「おう、おう。」と叫んで向かってきました。

けれども体が大きいばかりで勇気のない鬼どもは、さんざんきじに目をつつかれ、犬に向こうずねをかまれ、猿に顔を引っかかれて、

鉄の棒をほうり出して降参してしまいました。

最後までがまんして戦っていた鬼の大將も、とうとう桃太郎に組みふせられてしまいました。

桃太郎は大きな鬼の背中に馬乗りにまたがって、「どうだ、これでも降参しないか。」と言ってぎゅうぎゅう押さえつけました。

鬼の大將は、桃太郎の力で押さえつけられ、苦しくてたまらず、大粒の涙をぼろぼろこぼしました。

「降参します、降参します。命だけはお助けください。その代わりに宝物をすべてさし上げます。」こう言って、ゆるしてもらいました。

鬼の大將は約束どおり、お城から隠れみの、隠れ笠、打ち出の小づち、如意宝珠、

そのほかさんごやたいまいやりなど、世界でいちばん貴重な宝物を山のように車に積んで出しました。

桃太郎はたくさんの宝物を積んで、三人の家来といっしょにまた船に乗りました。

帰りは行きよりも速く船が進み、間もなく日本に着きました。

船が陸に着くと、宝物をいっぱい積んだ車を、犬が先に立って引き出しました。きじが綱を引き、猿があとを押しました。

「えんやらさ、えんやらさ。」三人は重そうにかけ声をかけ進んでいきました。

家ではおじいさんとおばあさんがかわるがわる、「もう桃太郎が帰りそうなものだが。」と言い、首をのばして待っていました。

そこへ桃太郎が三人のりっぱな家来に宝物を引かせて、さもつくらしい様子で帰ってきましたので、おじいさんもおばあさんも喜びました。

「えらいぞ、えらいぞ、それこそ日本一だ。」とおじいさんは言いました。

「まあ、まあ、けががなくって何よりさ。」とおばあさんは言いました。

桃太郎はその時犬と猿ときじの方を向いてこう言いました。「どうだ。鬼退治はおもしろかったなあ。」

犬はワンワンとうれしそうにほえ、猿はキャッキョと笑いながら白い歯をむき出し、きじはケンケンと鳴きながらくるくと宙返りをしました。

空は青々と晴れ上がって、お庭には桜の花が咲き乱れていました。

「桃太郎」は、いかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



Japanese-listening-SUSHI

